

# アラブ・メディアのジレンマ

ナジーブ・エルカシュ（ジャーナリスト）

アラビア語圏のメディアのあり方を規定しているのは、アラブ世界だからこそ起こりうるいくつかの衝突や矛盾である。なかでもおそらくもっとも重要なものは、民族主義と宗教的イデオロギーとの間にある衝突だ。そのほとんどが第二次世界大戦後につくられた近代的なアラブの政治制度は、アラビア語という言語的結びつきを強調する世俗的な民族主義（アラブ主義）の体制と、アラブ人の大部分がイスラム教徒であるということにより重視する宗教的な（ムスリム）体制に二分されている。地理的には、主要なムスリムの政権がサウジアラビア、カタール、その他の湾岸地域の国々の位置するアラビア半島にあるのに対し、世俗的な民族主義の政権はシリア、エジプト、リビアなど、地中海側のアラブ世界において大勢を占めている。二つの勢力はここ数十年の間、アラブ世界の覇権をめぐる熾烈な競争を繰り広げてきた。

近ごろの「アラブの春」の到来は、この地域の政治的衝突をいっそう深刻なものにすることとなった。この動きに伴うメディアの報道は、これまで水面下にあった矛盾を、今までにない、ときに茶番めいた仕方でも露呈している。状況を理解するためには、アラブの政治は「見かけどおりではない」というだけでなく、実際には「見かけとまったくちがう」ということを心にとめておかなければならない。このことを説明するために、それぞれの立場からひとつ例をとり上げることにしてしよう。

まずは「世俗陣営」からみていこう。1963年を端緒としてシリアとイラクの両国は、派閥は異なるが、ともにバアス党（アラブ社会主義復興党）による統治がなされてきた。世俗的な民族主義政党であるバアス党は、その最も重要な使命をアラブ諸国を統合することにあるとしている。シリアとイラクは国境を接し、双方が統合、あるいは少なくとも連合国家にしたいと考えているが、実際にはそれぞれの政権が自らが「本当のバアス」を代表していると主張して、互いに激しく反目し合ってきた。1980年にイラクがイランと戦争を始めたとき、シリアのバアス党政権は、同じく世俗的なアラブ政権であるイラクに対抗し、アラブ主義をとらない宗教的な政体を持つイラン側についた。シリア＝イランの同盟関係はいまなお続いていて、現在のシリアの騒乱に関しても、イランは政権側を支援している。この二国間の同盟にはらまれているのと同じような矛盾は、メディア

においてもみられるものだ。シリアのテレビ報道におけるコメンタリーのかかなりの部分は、反政府勢力の「中世的宗教観」を批判することに充てられており、そのあごひげの風貌を嘲笑しつつ、女性への抑圧、公開処刑などの話題が語られている。政権の支持者たちは対照的に、西洋の服を着て、偏狭でない世界観をもった近代的で自由な人々として表現される。しかし実際には、同盟関係にあるイランの政権、レバノンのヒズボラ政権は、どちらも宗教的な政策を掲げている。結果として、イランのアルアラム・テレビや、ヒズボラのアルマナル・テレビを見るアラブの視聴者は、そこでヴェールを被った女性やあごひげをはやした男性のニュースキャスターが、世俗的なシリア政権への称賛を謳いつつ、今度はその敵対勢力の行き過ぎた宗教観を批判するのを見て、当惑を覚えることになる。

続いて、もう一方の側であるムスリムの陣営をみてみよう。サウジアラビア王国は、超保守的なイスラム教の解釈を採用するワッハーブ派の教義に従っている。2012年、エジプトで初めての自由選挙が行われた結果、宗教的勢力の一派（ムスリム同胞団）が、60年間続いた世俗的軍事政権の後を継いで政権を握ることになったとき、私は無邪気にもその出来事を、アラブ世界におけるムスリム陣営の勝利として考えていた。しかし、サウジアラビアの人々の考えはそうではなかった。2013年7月3日、エジプトでイスラム主義を掲げた大統領がクーデターで失脚したとき、サウジアラビア資本のメディアはエジプト軍に賞賛の声を上げ、「テロとの戦い」について語り出した。新たに政権についた世俗主義的な軍政府に対しては、支援のための使節と経済援助が送られた。このことだけでも驚きだが、同じワッハーブ派の国であるカタールが正反対の立場をとったことを考えると、もはや頭が混乱してしまう。カタールを拠点とするアルジャジーラは、ムスリム同胞団に肩入れする報道に力を入れていて、中立の立場などとはや装おうともしていない。不条理に見えるかもしれないが、同じワッハーブの兄弟であるサウジアラビア、カタールの両国が互いに対抗意識を燃やしている、と考えることも可能である。シリアとイラクがバアス党同士でライバル関係にあったことを思えば、そのような説明も部分的には当たっているかもしれない。

これまで、アラブで映画や他の創作活動を行うものたち

は、体制側の検閲機関とイタチごっこを演じつつ、この地域の政治を二分する両陣営と渡り合ってきたものだった。より自由な創作をするべくヨーロッパの資本を頼ることもあったが、その多くはパレスチナ問題に関してアラブの誇りを忘れることなく、イスラエルの占領が続くかぎり、関係正常化を求める欧州各国からの圧力は受け付けないとする姿勢を堅持した。厳しい時代ではあったが、自らの立場を維持するための錨はまだ降ろされたままだったのだ。翻って現在、イデオロギーよりも政治的な利害関係が容赦なく

優先されることで生じたこの状況、ばらばらの断片となり、矛盾で溢れかえったこの状況のなか、映画の作り手たちはいま、地雷原の真っ只中を歩いているところのように思われる。それによって新たな芸術の波が生み出されるかはまだわからない。いまのところ確かなのは、予測しがたい急展開を見せる地域全体の事態の進展に遅れをとらないよう、カメラが至るところで廻りつづけているということだけだ。

(慶野優太郎訳)

#### ■トーク

それぞれの「アラブの春」番外編：監督&ナジーブさんに聞いてみよう！

10/14 16:00-17:00 | 山形市民会館ギャラリー | 入場無料